

# 注文の多い料理店

宮沢賢治

二人の若い<sup>しんし</sup>紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする<sup>てっぽう</sup>鉄砲をかついで、<sup>しろくま</sup>白熊のような<sup>ひき</sup>犬を二足つれて、<sup>やまおく</sup>だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを<sup>い</sup>云いながら、あるいておりました。

「ぜんたい、ここらの山は<sup>け</sup>怪しからんね。鳥も<sup>けもの</sup>獣も一疋も居やがらん。なんでも構わないから、早くタンタアーンと、やって見たいもんだなあ。」

「<sup>しか</sup>鹿の黄色な横っ腹なんぞに、二三発<sup>みまい</sup>お見舞もうしたら、ずいぶん痛快だろうねえ。くるくるまわって、それからど<sup>たお</sup>たっと倒れるだろうねえ。」

それはだいぶ山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちょっとまごついて、どこかへ行ってしまったくらい<sup>の</sup>山奥でした。

それに、あんまり山が<sup>ものすご</sup>物凄いので、その白熊のような犬が、二足いっしょに<sup>うな</sup>めまいを起こして、しばらく吠って、それから<sup>あわ</sup>泡を吐いて<sup>は</sup>死んでしまいました。

「じつにぼくは、二千四百円の損害だ」と一人の紳士が、その犬の<sup>ま</sup>眼ぶたを、ちょっとかえしてみ言いました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もひとりが、くやしそうに、あたまをまげて言いました。

はじめの紳士は、すこし顔いろを悪くして、じっと、もひとりの紳士の、顔つきを見ながら云いました。

「ぼくはもう戻ろうとおもう。」

「さあ、ぼくもちょうど寒くはなったし腹は空いてきたし戻ろうとおもう。」

「そいじゃ、これで切りあげよう。なあに戻りに、昨日の宿屋で、山鳥を拾円じゅうえんも買って帰ればいい。」

「兎うさぎもでていたねえ。そうすれば結局おんなじこった。では帰ろうじゃないか」

ところがどうも困ったことは、どっちへ行けば戻れるのか、いっこうに見当がつかなくなっていました。

風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

「どうも腹が空いた。さっきから横っ腹が痛くてたまらないんだ。」

「ぼくもそうだ。もうあんまりあるきたくないな。」

「あるきたくないよ。ああ困ったなあ、何かたべたいなあ。」

「喰たべたいもんだなあ」

二人の紳士は、ざわざわ鳴るすすきの中で、こんなことを云いました。

その時ふとうしろを見ますと、立派な<sup>いっけん</sup>一軒の西洋造りの家がありました。

そして<sup>げんかん</sup>玄関には

RESTAURANT

西洋料理店

WILDCAT HOUSE

山猫軒

という札がでていました。